Ⅱ．教育実践総合センター教員からのメッセージ

子ども理解の深化、メイクフレンズ活動の進化
― 更によりよいものを目指して、つながること ―

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター兼務教員
熊本大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻（教職大学院）専任教授　中　山　玄　三

昨年度（平成３０・２０１８年度）は、特に、Plan-Do-Check-Action（PDCA）サイクルの行動すること（A）として「次に活かすこと」が、メイフレ方針に掲げられていました。その中でも、注目すべきは、単発班の取り組みでした。「例年と異なり、年間を通して一方の公民館で活動を行い、振り返り、改善をした後に、他方の公民館でもう一度同じ内容の活動を行う。」、同じ活動を場所を変えて行う、つまり「活動と活動をつなぐ、場所と場所を活動でつなぐ」という、メイフレ史上初の画期的な発想の転換、いわゆるパラダイム転換が起きたことが、とても嬉しかったし感動しました。

今年度（令和元・2019年度）は、「昨年度と今年度をつなぐ、活動と活動をつなぐ、場所と場所をつなぐ、学生の学年と学年をつなぐ、つまり世代間の経験をつなぐことで、子ども理解をより深化させ、メイクフレンズ活動をより進化させる」ということが、メイフレ方針に掲げられています。実際の各班の取り組みでは、次のような努力の跡が読み取れます。

一つ目は、単発班の取り組みで、活動と活動をつなぐことが確実に定着したことです。報告では、例えば、「同じ活動を東部と秋津にて２回させていただける中で、１回目の活動での反省点を２回目の活動に直接活かすことができたため、より充実した活動となった。（前期秋津・東部単発班）」、「昨年に引き続き、同じ活動を２回させていただいたので、１回目の活動で行った支援の結果見られた子どもの姿をもとに２回目の活動に向けてより良い支援を考えることができた。（後期秋津・東部単発班）」などと学生は述べています。

二つ目は、新規に発足した中央公民館での取り組みで、学生と学生をつなぐ、これまでに体得した経験と経験をつなぐことで、新たな挑戦に臨んだことです。報告では、例えば、「この一度の活動を通して、班員の学生と連携することの重要さ、子どもの立場に立って支援や企画を考えることの難しさを改めて実感することができた。（前期中央単発班）」、「２つの活動を企画・運営していく中で、意見をまとめる力や改善点を見つけ出す力を身に付けることができた。（後期中央単発班）」などと学生は述べています。

三つ目は、ホール班の取り組みで、一つの年間目標のもとで活動と活動をつなぐという、進化がみられたことです。報告では、例えば、「居場所づくりという年間目標のもと、10月・12月・１月・２月の計４回の活動を行った。（中略）年間目標である居場所づくりは達成できたと言っていいのではないかと考える。この居場所づくりはホール班の強みでもあると思うので、今後も継続し、より深めていきたい。（後期五福ホール班）」などと学生は述べています。

四つ目は、プランナー班の取り組みで、一つの年間目標のもとで活動と活動を継続してつなぐことで、プランナーや参加者の子どもと子どもをつなぎ、輪を広げ仲を深める姿から、子ども理解を深めることができたことです。報告では、例えば、「１年間の活動を通して、主体性については、会議時の他人の発言を踏まえた上で発言する姿、活動時の参加者に合わせて対応する姿などが見られるようになり、協調性については、会議や活動で同じ目標の中、協力する姿や、活動以外の場面でも関わり合う姿が見られた。（後期大江プランナー班）」、「１年間の活動を通して、プランナー自身で活動を進めたり、会議で決めたことを本番で実行したりすることで、他者を尊重する姿が見られるようになった。（後期託麻プランナー班）」などと学生は述べています。

確かにメイフレは進化し続けていることを、今年度また実感できました。更によりよいものを目指して、『つながり』を大切にすることで、子ども理解の『深化』とメイクフレンズ活動の『進化』を、今後とも期待してやみません。

最後に、令和２年３月、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、フレンドシップ事業シンポジウムならびに学生自主企画分科会、追い出しコンパの中止を、私が決定しました。平成９年度以来、私がずっと関わり続けてきた行事がとぎれたことは、本当に残念です。私は、当時３７歳、今年還暦を迎えました。ウイルスは必ずいつか収束に向かいます。これまでメイクフレンズの歴代学生がつないできたタスキを『つなぐ』ために、今回予定していたシンポジウムと分科会をいつの日か必ず開催できることを切に願っていますし、また、その実現に向けていかなる努力も惜しまない覚悟でいます。修了生および在校生の皆さんにおかれましては、その日が来る時まで粘り強く希望を持ち続けておいて下さい。

令和元年度熊大メイクフレンズの活動に関わって思うこと

熊本大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻（教職大学院）
シニア教授　長　濵　茂　喜

３月４日に予定されていたフレンドシップ事業シンポジウムが、新型コロナウィルス感染拡大防止措置のため中止になりました。シンポジウムに向けいろいろと準備をしてきた学生の皆様にとっては、大変残念なことであったと思います。シンポジウムでの発表を聞いてこの原稿を書く予定でしたが、それもできませんので、送付いただいた発表用の資料を拝見し、また、この１年の定例会への出席と公民館での実際の活動の参観を通して、メイクフレンズへの思い等を書いてみたいと思います。

私が熊大メイクフレンズの顧問として、メイクフレンズの活動に関わって６年になります。一番印象に残っているのは、メンバーが変わっても、定例会や公民館での活動において、学生のみなさんが熱心に意欲的に取り組んでいる姿です。

定例会では、18時過ぎにもかかわらず、活動を充実するために真剣に協議している姿、活動が終わった後の振り返り会では活動の報告をした後、成果や課題を明らかにしながら積極的に意見を交わしている姿が印象に残っています。皆さんの熱心に活動する姿はいつも変わらず、関われば関わるほどメイクフレンズの活動の素晴らしさと奥深さを感じてきました。

今年度の実施・成果報告書を拝見しました。砂原船長の「2019（令和元）年度のメイクフレンズの活動体系について」では、今年度の方針である「つなげる、しんかする」についてその意図がしっかり述べられていました。そのことを基本理念として各班の活動が実施されたものと思っています。報告書には「秋津・東部単発班」「中央単発班」「五福ホール班」「大江プランナー班」「託麻プランナー班」それぞれの活動の様子がしっかりまとめられていました。それぞれ目標が明確で、子どもたちのそれぞれの場面での姿をイメージし、子どもたちが主体的に活動し目標が達成できるよう創意工夫をし、子ども達が意欲的に活動している姿が伺われました。公民館での実際の活動を何度も参観していましたので、子どもたちが試行錯誤しながらも豊かな発想で意欲的に活動している姿、学生の皆さんが子どもたち一人一人にきめ細かく支援している姿が鮮明によみがえりました。良い活動にするためにはその準備がいかに大事か、事前の活動計画が綿密になされ、必要な用具等も万全に準備されている場面を拝見するたびに、そのことを再認識したところです。良い活動を展開するためには、「計画→活動→振り返り→改善」という PDCA サイクルによるマネジメントの手法もかかせません。そのことをしっかり踏まえての取り組みにも感心しているところです。

また、学生の皆さんは、このメイクフレンズの活動を通してたくさんのことを得たと思います。企画力、実践力はもちろんですが、今の学校現場で求められている「コミュニケーション力」「チームで協働する力」「熟議による合意形成と実践」などについても、実際に体験しその手法等を確実に身につけてきていると思っています。それらのことは将来教職についた時即役に立つものです。活動を通し更にこれらの力を高めていって欲しいと願っています。

また、公民館での活動に際していろいろと指導助言等頂いた各公民館の社会教育主事の先生方には、心より感謝申し上げます。

最後に、メイクフレンズのよき伝統が引き継がれ、活動が益々充実していくことを願っています。

メイクフレンズの活動に関わって思うこと

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
特任教授　甲　山　敏　彦

新型コロナウイルスの流行に伴う本学の対応により、フレンドシップ事業シンポジウムが中止となってしまいました。ムービーを交えたシンポジウムの発表は、各活動の学生たちの様子やそれに対応する子どもたちの生の様子がよく伝わってくるので、とても楽しみにしていました。それだけに、その報告を聞けなかったことは誠に残念です。

この日のために準備をしてきた学生の皆さんは、きっとそれ以上に残念だったことでしょう。「つなげる、しんかする」という本年度方針のもと、多くの行事を企画・運営し、貴重な体験活動を通して様々なことを学んできたことと思いますが、その発表の場がなくなってしまった無念さは、言葉にできないものがあると思います。「入学の時は、熊本地震で、卒業の時は、新型コロナウイルス…。」と語った島村元船長の言葉が耳に焼き付いています。

しかし、人生では、このように予期せぬ事態に出会うことが度々あります。特に、生きた人間を相手にする教職人生の中では、まったく予想もしなかったことに出会うことがままあるのです。そういう場面に遭遇した時に必要な資質能力こそ、このメイクフレンズで培うことができているのではないかと、今回つくづく感じています。仲間と協働してチームとして対応する力、地域や社会と連携・協働できる力、豊かなコミュニケーション力などです。また、思い通りにいかない時、その場その場に応じて臨機応変に対応できる力も育成できていると思います。「こんな時は、どうするか」といろんなことをシュミレーションしながら対応を考える力は、まさしく子どもたちとの生きたふれあいを通して培うことのできる実践的指導力だと思います。今年は、東部公民館、大江公民館、五福公民館にお邪魔しましたが、どこの活動においても学生各自が自分の役割を自覚し、チームとして活動できていたと思います。本年度、日本中を沸かせたラグビー日本チームのスローガン「ONE　TEAM（ワンチーム）」という言葉は、まししくメイクフレンズのためにある言葉だなと思ったところです。今後も、「チーム・メイクフレンズ」として、よき伝統を引き継ぎながら、活動を充実されていかれることを心から祈っています。

2019（令和元）年度　熊本大学教育学部
フレンドシップ事業実施・成果報告書

2020（令和２）年３月31日

編集・発行　熊本大学教育学部附属教育実践総合センター
〒860-0081　熊本市中央区京町本丁５番12号
TEL(096)325-3282　FAX(096)352-3468
印　　刷　かもめ印刷